

ネイチャー高知

No32 2009年1月17日発行

研修会(講演会)と総会のお知らせ

2009年度の総会とそれに先立っての研修会(講演会)を次のとおり開催します。

研修会(講演会)

日時 2009年2月22日(日曜日) 午後1時30分から

場所 高知市本町4丁目3-30 高知県民文化ホール2階 第3多目的室

演題 「土佐の自然植物あれこれ」

講師 小林史郎さん

(前牧野植物園客員研究員 現在高知新聞夕刊に連載中の「土佐の植物日誌」の執筆者です)

参加料 無料

※ 研修会(講演会)は会員以外の方の聴講も自由です。お誘い合わせのうえ、ご参加ください。

総会

日時 2009年2月22日(日曜日) 午後3時から(予定:研修会が終了後始めます。)

場所 高知市本町4丁目3-30 高知県立県民文化ホール2階 第3多目的室

議題 2008年度事業報告・決算について

2009年度事業計画・予算について

会則の変更(顧問の新設等)について

その他

会場は右の図のとおりです。

研修会・総会への参加について、同封のハガキで2月15日までにお知らせください。

なお、総会に欠席される場合には、必ず委任状を提出くださるようお願いいたします。



会場はこちら
昔の中央公民館です

田城 光子

今から約120年前。牧野富太郎ら7名は、植物採集のため高知県西部を旅している。その様子を、同行の岩本嘉弥太の日記「植物採集旅行記」により知ることが出来る。旅行の一部始終が簡潔に記されていて面白い。旅行記をもとに、青年牧野富太郎の足跡をたどり三原の自然を満喫しよう、という催しが開かれ参加した。

明治22年8月5日、現在の四万十市江ノ村を経て三原村宮ノ川に入った時は、夜になっていたそうだ。この日の観察会の出発点である五社神社は、今でこそ広い道路がぬけて明るくなっているが、私が子供だった頃は昼でも薄暗くうっそうとした原生林に囲まれていた。百年以上も昔のしかも夜、このあたりの闇の深さはどのようなものであったろうか。歩き始めて間もなく、小さな橋が架かっている。この橋の下ではよく泳いだ。子供心には広くて深い川に思えたが、今見るとすいぶん小さな川である。ツルヨシなどが繁り、流れはほんの少ししかない。このあたりで立ち止まると、前方に牧野さんたちが越えてきた地蔵峠があり、振り返れば864メートルの今の山の頂が見える。四方を山に囲まれた播鉢の底のような三原村で、8月5日から8日までの間に一行は、ヒナノカンザシ、タニヘゴ、フシグロ、ミミカケソウ、ホザキノミミカケソウ（ミミカキグサ、ホザキノミミカキグサか？）、ロクホンソウ（フナバラソウのことか？あるいはジャクゼン？いずれにしてもガガイモ科の一種のようである）、オオバノヨウラクランなど、今ではあまり見ることのできなくなった珍しい植物を採集している。宿を借りた農家では合羽を着て寝たり、別の宿屋では三畳一間に7人で寝た、と書かれている。牧野さんは夜遅くまで鰻料理を食べていたために、蚊帳の外で寝たそうだ。グルメの牧野さんが、美味しそうに鰻を食べている様子を想像してみる。現在のように車も無く、設備の整った宿泊施設も無かったが、貴重な植物や天然の鰻に出会えた、なかなか贅沢な旅行だったようである。

私達は、その行程の一部を、一行とは逆周りに歩いた。

あちこちに、白い清楚な花を咲かせているサザンカが見える。自生も多いが、家々の庭や生垣に植えられたものもたくさんある。今年は花が少ないが、去年は



明治16年ごろの牧野富太郎（佐川の友人たちと）
牧野植物園HPから

雪が降ったように咲いた、と、その時の写真を見せていただいた。昔、この種子をカタシと呼び、油をとっていた。カタシ油は食用となり、絞りかすはシャンプーとして使った。しっとりとした艶やかな髪になって嬉しかった。ツバキ属にはヤブツバキ、ユキツバキ、サザンカ、チャノキがあり、どれも同じような油がとれると稲垣さんから教わった。この日はカタシ油の採油作業も体験できた。

橋を渡るとスギの植林が続く。昔は明るい雑木林だった。家族総出で薪をとりに来て、このあたりでオキナグサを見た記憶がある。ピロードのような花がとても印象的で、大人になってからそれがオキナグサだと知った時には、すでに里山は荒れ、このあたりでは絶滅していた。そのかわりスギ林の林床で、アキザキヤツシロランを見つけることができ、まだまだ豊かな自然が残っていることを嬉しく思った。

カマツカやコナラ、タカノツメなどが色づき、季節外れのフジツツジが花を咲かせている。オンツツジも多い。小枝に小さな果実を行儀よく並べているのはネジキ。落花時期には、山道がまるで雪が積もったように白くなる。枯葉をいっぱいつけたヤマコウバシは雌雄別種だが、まだ雄株が見つかっていないという不思議な木だ。雌株だけでちゃんと果実を実らせている。一枝折ると、かすかないいにおいがした。それが名前の由来である。センブリやキッコウハグマなどの小さな花も、見落とさずに歩く。センブリのことを知らない大学生カップルに、葉をかじってみよう勧めた。かじった後、ふたりは悲鳴を上げた。

「水！水！口直しに甘いもの！」

などと大騒ぎをしている。これでふたりは、センブリという植物をすっかり覚えだし、決して忘れることは無いだろう。

そんな騒ぎを、道端に腰を下ろして眺めている人たちが居た。植物採集旅行中の牧野さんご一行である。まぶしいほどに白いシャツ、きちんとネクタイをしめたおしゃれな牧野さんが居た。木の枝には、日記をはじめ、当時から昭和初期にかけての三原村の風景写真なども展示されていたが、その一枚の前で、私は動けなくなってしまった。なんと、まだ独身だったころの父を見つけたのだ。明治22年の青年牧野時太郎と若き日の父を前に、還暦を過ぎた私がみんなと植物のはなしをしながら歩いている。なんとも不思議な時間と空間であった。写真の下の陽だまりでお茶を飲みながら見上げた空の向こうには、一行が三原村での採集を終えて次の目的地である三崎村へと越えていった今の山の稜線が、くっきりと延びていた。

万葉集巻一。天智天皇が詔して春山と秋山はどちらが優れているか競わしたとき、額田王が歌で

「冬が過ぎて春になると、鳥は来て鳴き花も咲いているが、山の木々は繁り草も深くなっているので手に取って見ることもできない。秋はもみじを取って美しいと思い、青いものはそのままに置いて嘆息する。そこが恨めしいが、わたしは秋山が優れていると思う。」と答えている。たしかに秋山は美しい。でも、長い眠りから醒めた春の山には生命の息吹が感じられて、わたしは春山に軍配をあげたい。春のはなやかな山を「笑う」と形容し、「山笑う」は俳句の季語である。芽吹いたばかりの山は、一口に新緑とはいってもその緑は実にさまざまで、喜びをかくしきれないすべての生き物のざわめきが聞こえてくるように思う。しかし、良く見ると眠りから醒めたものばかりではない。冬の寒さに耐えた後、散りゆく生命もあることに気づく。それがいっそう春山の彩りを豊かなものにする。

樹木には常緑樹と落葉樹がある。緑の葉をつけたまま冬を越し、一年中葉をつけているのが常緑樹であり、春に広げた葉を秋、一斉に落とし裸木で冬を越すのが落葉樹であることは誰でも知っているよう。常緑樹の落葉の仕方は、樹種によってさまざまである。例えばホルトノキ科のホルトノキやコバンモチは、一年中赤い葉をチラホラとつけ、たえず落葉しているが、春には断然その数を増す。リンボクやテイカカズラも、はっとするほど赤くなり目だつようになる。入野松原や大岐海岸の防風林内のクスノキは、田植えの頃、黄葉した葉を散らしながら萌える新芽で林冠を赤く染める。

わが家の庭には、植えられて約15年のオガタマノキがある。まだ寒さの残る2~3月。甘いかすかな香りを放ちながら、モクレン科にしては小さい花が咲く。2階の屋根近くの高さで咲くので、開花にはなかなか気がつかない。白いはなびらが雪のように散り始めてから、花が咲いていたことを知る。そして4月~5月になると冬芽が開き、新葉がツンと立った状態が出てくると、古い葉は黄色く染まりながら下向きに垂れ落葉が始まる。約一ヶ月かけて殆どすべての葉が落ち、やわらかい新葉に変わる頃になると、どこからともなくミカドアゲハが産卵のために飛んでくるようになる。オガタマノキは、ミカドアゲハの食樹なのだ。緑色の愛くるしい幼虫は、近くの小学校の子供たちにも大人気で、蛹になる直前には飼育箱に移して学校に持ち帰り、羽化の瞬間まで観察することになっている。クロガネモチも、風雨が強い日、一斉に落葉する。この時期は、バ

ケツに何杯もの落ち葉を畑へ運ぶ日が続く。他にもトチノキやヤマボウシなどの、落葉樹も繁る雑木林のような庭は、晩秋、やはりたくさんの落ち葉で埋まる。そのため、わたしはほとんど一年中葉っぱと格闘していなければならない。

八田洋章さんによれば、葉の寿命は樹種により異なるが、落葉樹で約7ヶ月。常緑樹のクスノキなどは1年。タブノキやアカガシなどは2~3年。スギやヒノキは6~7年で枝ごと落ちる。シロダモの葉は10年くらい、イヌマキでは17年の記録があるそうだ。米国产マツ科イガゴヨウマツでは30年を超すと言う。我が家のオガタマノキとクロガネモチは1年の寿命である。林床にあるヤブコウジやマンリョウの落葉は、まだ注意して見たことがない。足摺岬から大月西海岸にかけて見られるアコウは、すべての固体がてんでばらばらに落葉し、新葉を展開し花囊をつける。裸樹があるかとおもえば、となりの固体は青々と葉を茂らせている。時期や周期のまちまちなこの樹木の葉っぱの寿命は、いったいどのくらいなのだろうか。

日本人の寿命は80年を超える時代。はるか彼方のことと置いていたが、あっという間に自分もその手前まで来てしまった。せめて散り際は美しくありたいと思うが、あれもしたい、これもしたいと欲ばりな自分は、枯れても未練がましく枝先にしがみついているような気がする。こんなことを言うと、ヤマコウバシやカシワに対して失礼だろうか。

シンポジウムのおしらせ

「三嶺の森をまもるみんなの会」主催シンポジウム

どう守る 危機に立つ三嶺の森 (2)

—深刻化する物部川源流のシカ食害—

日時：2009年1月25日(日) 13時~16時30分

会場：香美市保健福祉センター香北

(アンパンマンミュージアムの隣：入場無料)

第一部：報告「三嶺・剣山系の森の被害の実態と流域」

石川慎吾、内田忠宏、坂本彰、依光良三、

第二部：講演「増えすぎたニホンジカの指標と対策」

梶 光一 (東京農工大学教授)

第三部：質疑応答・ディスカッション

長年ニホンジカの問題に取り組んでおられる梶光一先生に来高いただくことができました。多くの皆様のご参加をお願いいたします。

主催：三嶺の森をまもるみんなの会

NACS-J自然しらべ 2008 カマキリをさがせ！ に参加

安芸市土居981-3 松本 孝 (自然観察指導員 登録NO.17502)

(財)日本自然保護協会では、毎年1つ、観察対象とするテーマを選び、全国で同じ時期に同じものを調べる全国一斉自然観察企画「NACS-J自然しらべ」を行っています。2008年はカマキリがテーマ。



カマキリは誰もが知っているお馴染みの昆虫です。が、私はこの自然しらべをするまで、単にカマキリはカマキリとしか思っておりませんでした。自然しらべを通して、身近なところに普通に、大きいカマキリ、中ぐらいのカマキリ、小さいカマキリがいることを実感し、実際に飼っていろいろな発見もありました。

私は放課後の時間帯に公民館で身近な自然を楽しむことを地元の児童たちに呼び掛けており、カマキリを観察することも行ってみました。




カマキリを平気で捕まえる児童、こわごわ触ってみる児童、ちょっと離れてみる児童など、その接し方も様々。そういえば私も小学1年生のとき、一緒に遊んでくれていた確か2学年上の近所のお姉さんが、平気でカマキリを捕まえてチョウを食べさせていたのを、ちょっと離れて見ていたことを思い出したことでした。

今年の夏から秋にかけて、安芸市の自宅で観察したカマキリの様子を記します。




カマキリを見つけたが、このカマキリ、脱皮前？ 翅がまだ？ (平成20年8月3日撮影)			
			
①ガサガサ聞こえたので見るとカマキリがアブラゼミを捕まえて食べはじめるところでした。	②翅をチェックするが、その翅がどれ？ まだ子ども？脱皮前？	③胸の部分のみます。淡い黄色。オオカマキリの特徴です。	④威嚇の構えをするかどうかみますが、このカマキリは向かってこなかったです。
見つけたカマキリを飼育。8月15日に脱皮(羽化)していたのを確認。(平成20年8月16日撮影)			
			
①8月3日のオオカマキリが脱皮。	②昼間は目は緑色です。	③夜も更けると目は黒色になります。	④ちょっと失敬して翅の様子。大きな濃い模様がオオカマキリの特徴。
チョウを捕まえて、音がして、人に見つかる。翅に紋あり。(平成20年9月4日撮影)			
			④庭にある花の裏側より音がして見てみたら、カマキリが大型のチョウを捕まえていました。数時間たってその花の裏側を見てみると、その後もそこで待機？してました。捕まえて見てみると、翅に白い紋がありました。
①翅に白い紋が特徴。ハラビロカマキリです。	②複眼の黒い点は偽瞳孔 <small>まどうこう</small> といいます。どこ見ているのかとつい思っています。	③ファイティングポーズ。偽瞳孔がこのとき左寄り。よそ見しているみたいです。	
住民参加の公園づくり活動で発見。「大きくないカマキリ」で知られる？ (平成20年9月21日撮影)			

		③この日は、活動中だったことや手元に資料がなかったこと、捕まえて入れるケースもなかったこと等より、よく観察しませんでした。ハラビロカマキリかなと思ったぐらい。後で資料を見比べてココマキリではないかと思いましたが、はて？	④後日、ココマキリとわかりました。
①地元のご年配の方に「大きくないカマキリ」で知られていました。	②前脚をもっとよく見ておけば良かったと反省。		

「小さなカマキリがチョロチョロ」。見ると前脚に黒色の帯あり。(平成20年9月23日撮影)

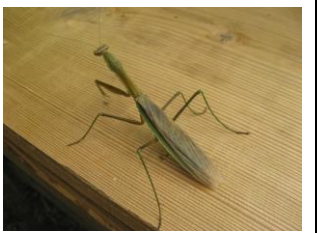



			④このカマキリは、自宅の勝手口でチョロチョロしていたのを見つけました。
①前脚を見ると黒帯が2か所ありました。ココマキリの特徴です。	②この日見たカマキリは小さいし細い感じです。	③特徴を見比べます。内縁刺の基部は1本おきに黒色がありました。	

別の飼っていたカマキリを改めて観察。胸の色が鮮やか、翅には筋があり。(平成20年10月5日撮影)

			④このカマキリの翅を見ると、前脚で指をさんざんひっかけられながらでした。痛かった。
①オオカマキリかと思っていたカマキリ。改めて観察してみたらちょっと違っていました。	②胸の黄色が鮮やかなことに気づきました。	③翅を見たら大きな濃い模様ではなく、筋が入っていました。チョウセンカマキリの特徴です。	

10月の中ごろ、庭で家のことをしていて、ふと近くを見ると数匹のオオカマキリがいたり飛んできたり。思った以上に身近にいることを実感しました。また卵鞘も家の雨戸の戸袋にあたり、飼っていた飼育ケースに産んだりしていました。卵鞘の形もカマキリの種類によって違ってきます。

今回、オオカマキリ、ハラビロカマキリ、ココマキリ、チョウセンカマキリの4種類を普通に見ることができました。また11月に近所を歩いていても、道でこれらのカマキリを見つけることもありました。

オオカマキリ	ハラビロカマキリ	ココマキリ	チョウセンカマキリ
			

カマキリは動くものを食べるので、私は畑に出ではバツタなどを捕まえて飼育ケースに入れていましたし、一つのケースには一匹なので、多い時には4つのケースが自宅の玄関先に並んでおりました。飼育ケースは縦に置き、中に木の枝を立てて入れ、カマキリがぶら下がることのできるようにして飼っていました。

これからも、いつの時代もカマキリが普通にいて遊べる環境であるように。

牛年干支セトラ

坂本 彰

2009年、牛年に因んで「ウシ」の名のつく植物を調べてみた。

牧野新日本植物図鑑では、シダ類を除いた草本類、木本類あわせて、ウシカバ、ウシクグ、ウシクサ、ウシコロシ、ウシタキソウ、ウシノケグサ、ウシノシッパイ、ウシノヒタイ、ウシハコベ、ウシブドウの10種が掲載されている。このうち、「ウシコロシ」は「かまつか」の、「ウシノヒタイ」は「みそそば」の、「ウシブドウ」は「まつぶさ」の異名であり、「ウシコロシ」を除いてあまり呼びなれていない。いずれも、動物のウシ（牛）に関連した名前かと思って調べてみるとそうでもない。

まず、牛に関係しない地名からつけられたものに、ウシタキソウがある。ウシタキソウについては、「牛滝草は山の名前に由来したものであろう」とあり、「大阪府にも富山県にも牛滝山があり、どちらに由来したかは不明である」となっている。余談になるが、富山県について、国土地理院の地図検索サービスを使って「牛滝」を調べたが何もヒットしなかった。念のため、「牛」「滝」でも調べたが、それらしいものを見つけることができなかった。一方、大阪府の牛滝山は、国土地理院の2万5千分の1の地図に「牛滝山」という地名は無いものの、紅葉の名所として知られており、役行者の創建と伝えられる牛滝山大威徳寺があるほか、『江戸時代の『葛嶺雑記』では、葛城の修験道場の巡礼について、紀州の友ヶ島から根来寺・粉河寺・和泉の牛滝山、河内の岩湧寺を経て大和に入り・・・(奈良県香芝市のHP)』とあるように、古くから知られた土地である。となると、大阪府・富山県どちらに由来したか不明というより、大阪府の牛滝山に由来したものとと言えるのではないか。

話を牛の名のつく植物に戻して、ウシカバについては、「牛樺は樹皮が黒くて剥ぐときには・・・」とあり、また、ウシブドウについては、「牛ブドウは実が熟すると黒色となるからである」と、さらに、ウシクグは「その果穂が紫褐色であることに由来する。」とある。いずれも、黒いことを表すのに「うし」が使われている。高知県では「土佐赤牛」といわれる、褐色の毛の牛が一般的であり、牛と黒とは結びつかないが、全国的に見ると牛=黒ということであろうか。

ウシハコベは、「普通のハコベと比べると草のようすが大形であるから牛といったものである」と、大きいことのたとえに「牛」が使われている。ウシクグについても、前述の果穂の色に由来するという説のほかに、「あるいは、全体が大形であることに由来するのかもしれない」との説も記述されている。

ウシノケグサは、細くて毛のような葉の形から「牛の毛」に見立てられて名がつけられたものであるが、動物の毛は細くて長いものである。ことさら牛の毛になぞらえたのは、葉が叢生している様子を牛の尻尾の毛に見立てたものではないだろうか。



ウシハコベ（自宅の庭で）

ウシノヒタイ（ミゾソバ）は葉の形からだが、これはよく分かりやすい。一目瞭然といったところである。

ウシノシッペイは、牧野図鑑では単に「牛の竹篋（しっぺい）」の意味で・・・とあるが、分かりづらい。竹篋（しっぺい）を辞書で引くと、例えば広辞苑では、『禅家で師家（しけ）が修行者の指導に用いる道具。長さ1尺5寸。竹で「へら」の形に作り、藤を巻き、漆を塗る。』とある。

ウシノシッペイを見たことがある方は、名の由来が特徴のある花序であることは容易に推察がつくが、それは「へらの形」には見えない。（広辞苑に掲載されている竹篋の図はウシノシッペイの花序に似ている。）

いろいろ調べている中で古語辞典(三省堂)に『竹製のツエ。禅宗で自分のからだを打って眠りを抑えるもの。』とあった。牛を追うための竹製のつえであれば、まさしくウシノシッペイの花序の形にぴったりである。これで納得できた。



牛のシッペイの花序（岡山理科大学総合情報学部生物地球システム学科植物生態研究室（波田研）のHPから）

ウシコロシ（カマツカ）はぶっそうな名前だが、別にこの棒で牛を叩き殺すのでは無く、『牛の鼻に綱を通すとき、この木で鼻の障子に孔を開けるので、ウシコロシの名がついた。』とある。私が子供のころ家で牛を飼っていたが、そのときの記憶だと、牛の鼻緒は「綱」というような大きさではなく、鉛筆よりも細く、棕櫚（しゅろ）を縄のように編んだものだった。それを良くしごき、真ちゅうでできた大きな針（三日月形に曲がっていた？）の耳に通しておいて、針を鼻の二つの孔の間の膜に刺し通していた。昔は針の代わりにカマツカの枝でも使っていたのだろうか？鼻の間の膜を通すのは人間もするので、痛みを感じない部分であろうが、それでもよく磨き、尖った物でないと、ザラザラした物を通されると痛かろう。

最後にウシクサが残ったが、牧野図鑑でも『牛草の意味ではないのになぜ牛と名づけたかは不明』とあり、牛との関連は分からない。

以上まとめてみると、ウシの名がつく植物は、

- ① 樹皮あるいは実が黒いことから牛(黒牛)に例えた・・・ウシカバ、ウシブドウ、ウシクグ
- ② 草の形が大きいことから牛に例えた・・・・・・・・ウシハコベ、ウシクグ
- ③ 葉が叢生していることを牛の尻尾の毛に例えた・・・・ウシノケグサ
- ④ 葉の形が牛の額に似ていた・・・・・・・・ウシノヒタイ（ミゾソバ）
- ⑤ 花序が牛を追う竹のツエに似ていた・・・・・・・・ウシノシッペイ
- ⑥ 牛の鼻緒を通すのに使った・・・・・・・・ウシコロシ（カマツカ）
- ⑦ 牛の名がついた意味が不明・・・・・・・・ウシクサ

と色々あって、牛のイメージとしてこれだというものは無かった。茫洋としてつかみ所の無いのが牛らしいのかもしれない。

観察会のお知らせ

スミシと早春の花観察会

観察会場の鏡ダム河畔の雑木林では、シハイスミシ、タチツボスミシ、コスミシなどスミシの仲間の他アマナ、シロボウエンゴサクなどの早春の花を見ることができます。

2009年3月28(土曜日) 午後1時30分から

場所 高知市鏡鏡ダム周辺

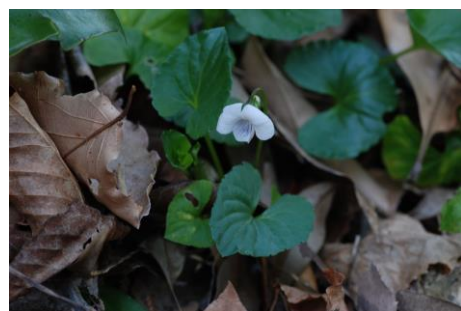
午後1時30分に高知市鏡(旧鏡村)川口橋北詰にお集りください

バス利用の方は、北部交通バス堺町発12時46分 畑川行き川口下車が便利です。

講師 細川公子さん

持参するもの 筆記用具 あれば図鑑

その他 雨天中止



原稿を募集します

「ネイチャー高知」の原稿を募集します。「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、1月、7月の年2回発行しています。自然保護に関する主張やエッセイ、フィールドの紹介など何でも結構ですので、どしどし投稿ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

NO 32

事務局 780-8075 高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail akira@baobab.or.jp